



Title	イブン・ハウカルのエジプト図について
Author(s)	竹田, 新
Citation	アラブ・イスラム研究. 2017, 15, p. 73-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105979
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

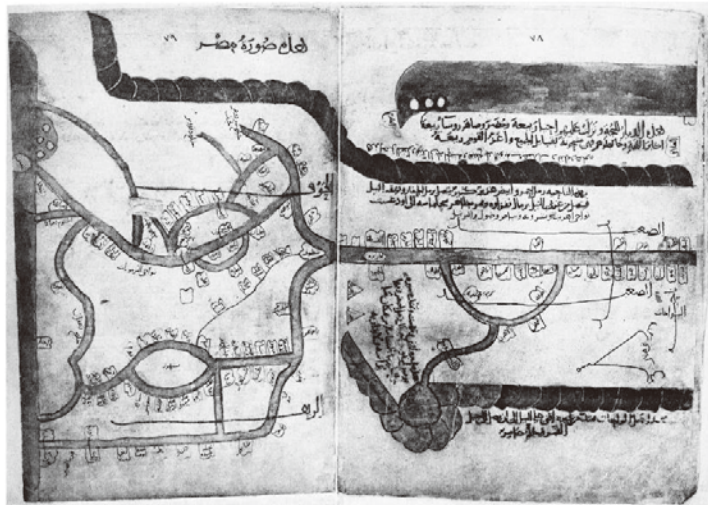
The University of Osaka

イブン・ハウカルのエジプト図について

竹田 新*

I. はじめに

本誌第12号に掲載したイブン・ハウカル Ibn Ḥawqal (Abū 'l-Qāsim Muḥammad b. °Alī, 380 AH / 990年頃没) の地中海世界図¹⁾は、環地中海世界全体を描いているとは言え、本来はマグリブ al-Maghrib (エジプトを除く北アフリカ) とアンダルス al-Andalus (イベリア半島) とルーム al-Rūm (主にビザンツ帝国領) を扱った図であったため、地中海の東側のシリア al-Sha'm とその下のエジプト Miṣr との部分の描写はほぼ空白に近かった。そこで、今回はその地図の不足部分を補うべく、イブン・ハウカルが別途に描いたエジプト部分の地図を紹介する。



イブン・ハウカルのエジプト図
第2部分 第1部分

この図は幾何学的図形を多用するバルヒー al-Balkhī 学派に属するが、この図が付されている地理書の本文中に図の説明が見られる(写字生による追記なのか)。本稿は先ず、地図の記載箇所に通し番号を付け、その番号を入れて、地理書本文中にある地図の説明部分を翻訳する。その後、地図の内容について、地域別に分けた考察を加え、もって、史料としての西暦10世紀のエジプト図の紹介とする。なお、本

* 大阪大学 名誉教授

1) 竹田[2014]

稿で用いるのは、イスタンブルの Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi 所蔵写本 Arab.3346 (479 AH/1086年) の地図²⁾と、主にその写本に基づいて Kramers が校訂したイブン・ハウカルの地理書『大地の姿』 *Kitāb Šūrat al-arḍ* [Leiden, 1938 (rep., 1967)] である。

II. 地図の説明部分の訳

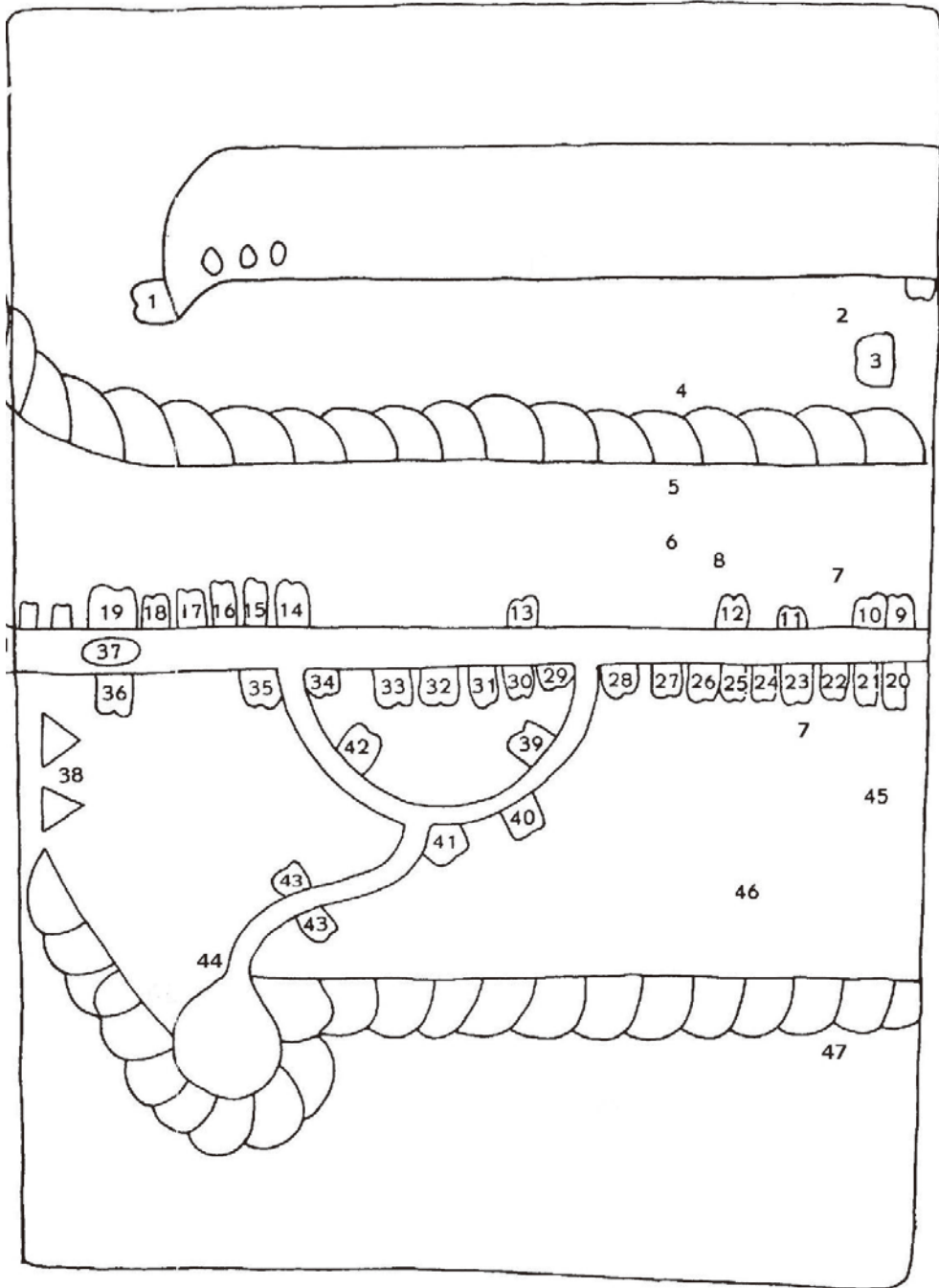
エジプト図の第1部分にある名前と文言との説明：³⁾

クルズム al-Qulzum の海（紅海）が図の上端に平行して描かれ、この海の左端に「クルズム」[1]の町 (madīnah) がある。次いで海岸線の下に「この地方(diyār)はベジャ al-Bujah に属する。彼らのもとにラビーア Rabī'ah とムダル Muḍar の諸集団が住み着き、ラビーアの長たちはベジャの有力者たちと姻戚関係を結び、混じり合った。その結果、この地方はそれら全ての部族で満ちているが、最も強大な民はラビーアである」[2]と書かれている。この文言の右には「アッラーキー al-°Allāqī」[3]の町がある。次いで上述の記載の下、山の連なりに平行して「これはムカッタム al-Muqattam の山で、アビシニア al-Ḥabashah 地方 (balad) まで伸びるが、ドンゴラ Dunqulah とアルワ °Alwah の諸居住地(°imārāt)においてヌビア al-Nūbah 地方を貫く」[4]とある。その山の下方、山と同じ線上に「この地域 (nāḥiyah) には、赤と白の夥しい量の砂地 (raml) がある。ギファール al-Jifār の砂地と繋がっているが、ナイル al-Nīl によってそれ（＝ギファール）と分かたれる。その結果、その砂地（＝赤と白の砂地）はナイルの西でナフザーワ Nafzāwah 砂漠 (rimāl) と繋がり、スィジルマーサ Sijilmāsah の外れを通り、アウダグスト Awdaghust に達する」[5]とある。次いでその下に「イフリート Ihrīt (Ahrīt)⁴⁾、シャルーナ Šharūnah、バヤード Bayād、スール Šūl、バルニール al-Barnīl (al-Burnīl) の各地域」[6]がある。ナイル川が紙の中央に描かれ、その両側のそれぞれに沿って「サイード al-Ša'īd(上エジプト)」[7]と書かれ、その（＝「サイード」という）2つの記載は「地方(balad)」[8]という語で結ばれる（＝それぞれ「サイード地方」となる）。ナイルの上側（＝東側）に沿って、右から町々のうち「アスワーン Uswān」[9]、「ムフダサ al-Muḥdathah?」[10]、「クース Qūs」[11]、「アフミーム Ikḥmīm (Akḥmīm)」[12]、「アンシナー Anšinā」[13]、「アトフィーフ Itfīh (Atfīh)」[14]、「アスクル Askur (Uskur)」[15]、「ハイイ al-Ḥayy」[16]、「ハラス al-Ḥaras」[17]、「ヘルワーン Ḥulwān (Hilwān)」[18]、「フスタート al-Fuṣṭāt」[19]、次いで、名前のない2つの町の形が見られる。ナイルの反対側（＝

2) 他に1種類の同系統 (Ibn Hawqal I)、3種類の異系統 (Ibn Hawqal III) の地図写本が知られている。

3) IH pp.132-33

4) 複数の読み方が多用される地名については、以降、綴りが同じ場合は（ ）内に、綴りが異なる場合は / の後に、それらを併記し、最も使用度が高いと考えられる読み方をカタカナで示す。



エジプト図 第1部分

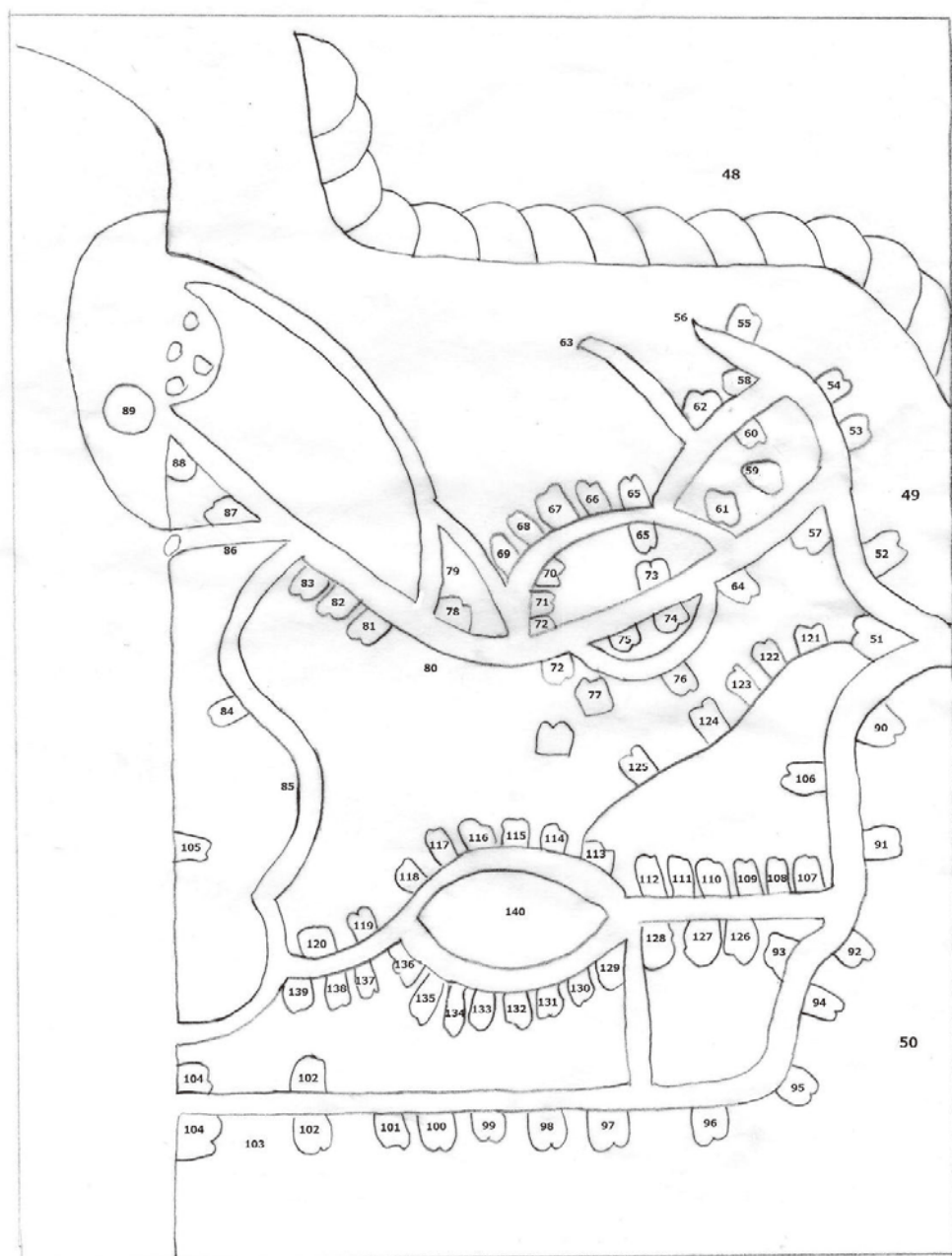
西側) に沿って「カルヤ Qaryah?」[20]、「イドフー Atfū (Itfū) / Idfū⁵⁾」[21]、「イスナー Isnā」[22]、「アルマント Armant」[23]、「ヒウ Hū (Hiw)」[24]、「バルヤナー al-Bulyanā (al-Balyanā)」[25]、「アブーティীগ Būtīj / Abū Tīj」[26]、「アスユート Usyūt (Asyūt) / Suyūt」[27]、「マサーラ Mīsārah < Minsārah [sic.] > / Masārah」[28]、「アシュムーナイン al-Ushmūnayn (al-Ashmūnayn)」[29]、「タハー Ṭahā」[30]、「カイス al-Qays」[31]、「スムスター Sumustā (Samsatā)」[32]、「ダラス Dalāṣ」[33]、「イフナース Ahnās (Ihnās)」[34]、「アトワーブ Aṭwāb (Itwāb)」[35]、「ギーザ al-Jīzah」[36]があり、フスタートとギーザの間には、ナイルの中に「ゲズイーラ al-Jazīrah (島の意)」[37]がある。ギーザのそばには2つの三角形があり、「これらはかの2つのピラミッドである」[38]と書かれている。マサーラとアシュムーナインとの間で分岐してイフナースとアトワーブとの間でナイルに戻る運河の岸に沿って、町々のうち「ティルファ Ṭīrfah < Ṭūfah [sic.] > / Ṭīrfā」[39]、「バフナサ al-Bahnasah / al-Bahnasā」[40]、「ラーフーン al-Lāhūn」[41]、「ブースィール・クーリーディス Būṣīr Qūrīdis (Qūrīdus) / Abū Ṣīr (Abūṣīr) Qūrīdis」[42]がある。ラーフーンのそばでこの運河から1つの支流 (shuḥbah) が分岐するが、その両側に沿って「ファイユーム al-Fayyūm」[43]がある。ファイユームと例の2つのピラミッドとの間に「これはアクナー Aqnā とタンハマト Tanhamat との湖 (カールーン湖) で、黄色い砂の山々の只中に2日の距離で広がる。この湖では、冬にはどこも太刀打ちできないほどの鳥が見られる」[44]と書かれている。次いでナイルの下方、地図の右には「諸オアシス地域」[45]、その下には「ヒラル族 Banū Hilāl の諸居住地 (masākin)」[46]がある。地図の下端に平行する山脈の下には「これは諸オアシスの山で、アクナー湖からナイル沿いに伸び、月の山に達する。その (= 諸オアシスの山の) 大部分は人が住んでいる」[47]と書かれている。

エジプト図の第2部分にある名前と文言との説明：⁶⁾

図の上端に「これはエジプト図である」[48]と読まれるが、それはまた、図の第1部分にも当てはまる。図の上半分には「ハウフ al-Ḥawf (ここでは下エジプトのダミエッタ支流の東側)」[49]、下半分には「リーフ al-Rīf (ここではダミエッタ支流の西側)」[50]と書かれている。ナイルが図の右端の中央で2つの支流に分岐し、両者の間に「シャタヌーフ Shatānūf (Shatnūf)」[51]の町がある。上方へ進む分流 (dhirāʿ) の右側には、町々のうち「ディグワ Dijwah」[52]、「バンハー・アル＝アサル Banhā al-ʿAsal」[53]、「タファフナ Tafahnah」[54]、「カンタラ al-Qanṭarah」[55]がある。その終わりには「サルドゥース Sardūs 運河は干上がっている」[56]と書かれている。その分流からは、2つの支流が左へ進み、第1の方は「タヌーハ Tanūhah / Antūhā」[57]の

5) Ufū, Adfū, Udfū と呼ばれる。

6) IH pp.133-34.



エジプト図 第2部分

そばから始まり、他方は「サフラグト *Ṣahraj*」[58] のそばから始まる。この2支流の間には、町々のうち「ズィフター・ガワード *Ziftā Jawād*」[59]、「サンド・バスト *Sand Bast* (*Sandabast*)」[60]、「タターヤ *Tatāyah*」[61] がある。サフラグトの左、その支流沿いに「イシュナワイ *Ishnawayah* <*Ishyah* [sic]> / *Ishnāwāy*⁷⁾」[62] があり、イシュナワイから左へ進む支流の終わりには「ダカドゥース *Daqadūs* (*Daqdūs*) 運河」[63] と書かれており、タヌーハの左、その支流沿いには「ミフナーン *Mikhnān* (*Mukhnān*)」[64] の町がある。ミフナーンと向かい合って1つの支流が進み、その沿岸に、先ず前述のタターヤ、次いでその支流の両側に「ダムスィース *Damsīs*」[65]、次に上側に「バナー *Banā* <*Tatā* [sic]>」[66]、「アブー・スィール *Abū Ṣīr* / *Būṣīr*」[67]、「サマンヌード *Samannūd*」[68]、「アウィーシュ *Ūsh* / *Awīsh*」[69]、そして下側に「タルハー *Talkhā*」[70]、「カガンギーマ *Qajanjīmah*」[71]、「ダミーラ *Damīrah* (*Dimīrah*)」[72] がある。ダミーラという名の冒頭はタヌーハの分流のもう一方の側(=西側)にある。ミフナーンとダミーラとの間、上側には「マハッラ・シャルキーユーン *Maḥallat Sharqīyūn*」[73]、反対側には「ミリーグ *Malīj* (*Milīj*)」[74] と「ザムズール *Zamzūr*」[75] がある。下方からこの最後の2つの地 (*balad*) を取り囲む支流の背後には「トゥーフ *Tūkh*」[76] と「マハッラ・ルーフ *Maḥallat Rūh*」[77] がある。ダミーラと向かい合って1つの支流が左へ進み、主流 (*ʿamūd*) に沿い「ダカフラ *Daqahlah*」[78] のそばに始まる別の支流に合流する。その2支流の間に「ダカフラ運河」[79] と書かれている。ダカフラと向かい合って主流の下方に「バラムーナート *al-Baramūnāt* 諸地域」[80] と書かれており、その左に、町々のうち「シャーリム・サーフ *Shārim Sāh* / *Shirimsāh*」[81]、「シャーリム・バーリム *Shārim Bārim*」[82]、「ブーラ *Būrah*」[83] がある。次いで主流から2つの支流が進み、その一方は下方「ナキーザ *Nuqayzah* (*Nuqayzah*)」[84] へと進む。この支流のそばには「ザアファラーン *Zaʿfarān* 運河」[85] と書かれており、もう一方の支流のそばには「ダミエッタ *Dimyāt* (*Dumyāt*) の口 (*ushtūm*)」[86] と書かれている。後者の支流と主流との間に「ダミエッタ」[87]、次いで海沿いに「シャター *Shatā*」[88]、そしてシャターのそばには海上に「ティンニース *Tinnīs* <*Tittīs* [sic]>」[89] 島がある。シャタヌーフから下方へ進む分流の右には、町々のうち「ザート・アッ＝サーヒル *Dhāt al-Sāhil*」[90]、「アブー・ユハンニス *Abū Yuhannis*」[91]、「タルヌート *Tarnūt*」[92]、それに向かい合って再び「タルヌート」[93]、次いで「ビスターマ *Bistāmah* / *Bishtāmī*」[94]、「タヌーブ *Tanūb* (*Tunūb*)」[95] がある。次いで分流の湾曲部の後、左に「シャブール *Shābūr*」[96]、「マハッラ・ナキーダ *Maḥallat Naqīdah* (*Nuqaydah*)」[97]、「ダンシャール *Danṣhāl* (*Dinṣhāl*)」[98]、「カルタサー *Qartasā*」[99]、「シャブール・アブー・ミーナー *Shabrū Abū Mīnā*」[100]、「カルンフイル *Qaranfīl* (*Qarnafīl*)」[101]、分流の両側に「カルユーン *al-Karyūn* (*al-Kiryawn*)」

7) Kramers & Wiet [1964, I, p. 132], Ducène [2004, p. 247], Cooper [2014, pp. 269, 273 他] はいずれも原文のまま、但し *Ishyah* ではなく *Ashīh* と読んでいる。これ以後の原文の綴りが間違っている地名も、Kamal [1926-] をはじめ、Kramers & Wiet [1964], Ducène [2004], Cooper [2014] はほぼ原文のままにしている。

[102]、次いで「カルヤ・アッ=スィール Qaryat al-Šīr」[103]、分流の両側に「アレクサンドリア al-Iskandarīyah」[104]、そしてアレクサンドリアの上、海岸沿いに「アグナー Ajnā (Ijnā)⁸⁾」[105]、シャタヌーフの下、この分流の左には「グライスィーヤート al-Juraysīyāt / al-Juraysāt (al-Jirīsāt)」[106] がある。グライスィーヤートの後、1つの支流が左へ進み、その上側には、町々のうち「シュブラー・ラウン Shabrū al-Lawn <al-Āw[sic]> / Shubrā Lawn」[107]、「ミヌーフ Manūf (Minūf)」[108]、「タター Tatā」[109]、「フィーシャ・バニー・スライム Fīshat Banī Sulaym」[110]、「ビンダーリーヤ al-Bindārīyah」[111]、「マハッラ・アル=マハルूम Maḥallat al-Maḥrūm」[112]、「サーŠā」[113]、「ディヤーイ Dayyāy (Diyāy)」[114]、「サーフィヤ al-Šāfiyah」[115]、「ダミー・ガムール Damī Jamūl (Damayjamūl)」[116]、「サンディユーン Sandiyūn (Sindiyūn)」[117]、「フーワ Fūwah (Fuwah)」[118]、「ディスユー Disyū (Dasiyū)」[119]、「ヌトゥービス・アッ=ルンマーン Nuṭūbis <Nuṭūyah (Naṭwayah) [sic]> al-Rummān」[120] がある。そしてシャタヌーフからサーへの街道上に、町々のうち「スブク・アル=アビード Subk al-ʿAbīd」[121]、「ミヌーフ・アル=ウルヤー Manūf (Minūf) al-ʿUlyā」[122]、「マハッラ・スラド Maḥallat Šurad (Šard)」[123]、「サハー Sakhā <Sakhā[sic]>」[124]、「シュブラー・ラムナ Shabralamnah / Shubrā Lamnah」[125] がある。次いでシュブラー・ラウンのそばから進む支流の下方に「タンティター Ṭantitā / Ṭanditā」[126]、「カリーブ・アル=ウンマール Qalīb (Qulayb) al-ʿUmmāl」[127]、「バビーグ Babīj」[128] があり、下方へ進む1つの支流が続く。次いで「マハッラ・バビーグ Maḥallat Babīj」[129]、「ファルナワ Farnawah / Farnawā」[130]、「マハッラ・マスルーク Maḥallat Masrūq」[131]、「マハッラ・アビー・フラーシャ Maḥallat Abī Khurāshah (Kharāshah)」[132]、「フィーシャ Fīshah」[133]、「サンダビース Sandabīs」[134]、「スンバーザ Sunbādhah」[135]、「バルヒーブ Balhīb」[136]、「ダイルート Dayrūt」[137]、「マハッラ・アル=アミール Maḥallat al-Amīr」[138]、「マハッラ・ブーラ Maḥallat Būlah」[139] があり、サーとマハッラ・バビージュとの両支流の間の島に「サンフル Sanhūr」[140] と書かれている。

III. 図中の上エジプトについて

彼がエジプトを訪れたのは、344 AH / 955年頃とされている⁹⁾。当時、エジプトはイフシード朝下であった。そして、図中にはフスタート[19] (旧カイロ) が挙がっているに過ぎないが、本文にはカイロ al-Qāhirah についての説明がある¹⁰⁾。358 AH / 969年、エジプトを征服したファーティマ朝はフスタートに代わる新都を建設した。ところが、この新都がカイロと命名されたのは 362 AH / 973年のカリフのムイッズ

8) Ajnū, Akhnā, Ikhnā, Akhnū, Ikhnū と呼ばれる。

9) Miquel [1971, p. 787], Murād [2004, p. 34], Ducène [2004, p. 242].

10) IH pp. 146-47.

al-Muʿizz の入城後と言われる¹¹⁾。ということは、イブン・ハウカルのエジプトの情報には少なくとも本文中では 358 AH 或いは 362 AH までを含んでいることになる。

イブン・ハウカルにとってのエジプトの範囲は、東はラファフ Rafah (シナイ半島最北部の、現在もエジプトの国境) 付近まで¹²⁾、西はアレクサンドリア [104] とバルカ Barqah (現リビアのマルジュ al-Marj) との間まで¹³⁾、南はアスワーン [9] やアッラーキー [3] (アスワーンより南にあった金鉱で、現在はエジプト最南部ナセル Nāṣir 湖底に位置する) 周辺までと言える。

彼のエジプト図は、いわゆるバルヒー学派に属するもので、距離・方位の正確な表現ではなく、集落・水路・山地などの位相関係の表現に力点が置かれている。そのエジプト図は東を天とする長方形の2枚からなり、1枚はナイルが2つに分かれる前の部分で、彼がサイドと呼んでいる上エジプトであり、もう1枚は後述する下エジプトの図である。

この上エジプト図(エジプト図の第1部分で、全体の右半分)は、上部(東)から横長に、紅海、次いでその下に山の連なり、3番目にナイル川、4番目に山の連なり、そして3番目と4番目の間にナイル川から分かれる水路と左下のカールーン Qārūn 湖が描かれている。

1番目の紅海の左隅にクルズム[1]が示されている。クルズムは紅海の入口にあった港市で、水深が浅い港であったこともあり、10世紀後半から1マイルほど南西のスエズ al-Suways に交易港としての地位を徐々に奪われてゆき、12世紀には廃墟になったと考えられる。

紅海とその下の山の連なりとの間には、ベジャの地 [2] が記され、その右端にはアッラーキー [3] が描かれている。当時、ベジャ人は大凡、上エジプトのナイル川東岸のキフト Qift より東や南の砂漠地帯に住んでいたが、アラブ系遊牧諸部族との混血化が進み、アッラーキーにも混住していた。

次に来るその下の山の連なりは「ムカッタムの山」[4]と明記されている。ムカッタムというのは現カイロ市内東部にある丘の名であり、この名で総称されている図上の山の連なりは、実際は殆どが 200~500m か 500~1000m の高地である。次の砂地 [5] と共に、大きな括りではシャルキーヤ砂漠 al-Ṣahrā' al-Sharqīyah に属する。シャルキーヤ砂漠は紅海山脈を形成する山系から派生した高地とされている。

「ムカッタムの山」[4]の西側に広がる砂地 [5] とナイル川との間には、イフリート、シャルーナ、バヤード、スール、ブルニールの各地域 [6] があると記されているが、いずれもナイル川より東側にある、単数或いは複数の村落を有する土地であり、イフリートは現アッ=シェイフ・ファドル al-Shaykh Faḍl と言われ¹⁴⁾、シャルーナ

11) Ramzī [1953-, II·1, p. 3], Halm [1993, p. 162].

12) イブン・ハウカルはガザ Ghazzah がエジプト側のパレスチナ最後の町としている (IH p. 172) ので、ラムラ al-Ramlah とフスタートを結ぶ道における、その次の町ラファフ (IH p. 144) 辺りからがエジプトということになる。

13) IH p. 132.

14) Ramzī [1953-, I, p. 133, II·3, p. 213].

(シャールーナ Shārūnah) と共に現ミニヤー al-Minyā 県、バヤードは現バヤード・アン＝ナサーラー Bayāḍ al-Naṣārā で現バニー・スウェイフ Banī Suwayf 県、スールは現ギーザ県、ブルニールは現ブルンブル al-Burumbul とされ¹⁵⁾、同じく現ギーザ県に属する。

図の中央部を横に貫いてナイル川とその流域の町村が描かれている。南からナイル本流沿い或いはその付近（以下、この両者を便宜的に右岸・左岸と表記する¹⁶⁾）に、アスワーン [9] (右岸)、イドフー [21] (左岸)、イスナー [22] (左岸)、アルマント [23] (左岸)、クース Qūṣ [11] (右岸)、ヒウ [24] (左岸)、アフミーム [12] (右岸)、バルヤナー [25] (左岸)、アブーティーン [26] (左岸)、アスユート [27] (左岸)、マサーラ [28] (左岸)、アシュムーナイン [29] (左岸)、アンスィナー [13] (右岸)、タハー [30] (左岸)、カイス [31] (左岸)、ダラース [33] (左岸)、アトワーブ [35] (左岸)、アトフィーフ [14] (右岸)、アスクル [15] (右岸)、ハイイ [16] (右岸)、ハラス [17] (右岸)、ヘルワーン [18] (右岸)、ギーザ [36] (左岸)、フスタート [19] (右岸) が続く。

また、流路の途中から左下方のカールーン湖（「アクナー Aqnā とタンハマト Tanhamat との湖」）[44] へと通ずる水路も描かれているが、これはナイルから前述のマサーラ [28] を過ぎて左側へ分かれる運河（バハル・ユースフ Baḥr Yūsuf）である。ティルファ [39] (左岸)、バフナサ [40] (左岸)、スムスター [32] (右岸)、イフナース [34] (右岸)、ラーフーン [41] (右岸) まで進むと、ここで水路は2つに分かれ、一方はブースィール・クーリーディス [42] (右岸) を通ってナイル川と連絡する。他方はファイユーム [43] (両岸) を貫いて、カールーン湖へと通じている。

その他、ギーザ [36] とフスタート [19] との間にナイル川の中洲ゲズィーラ [37] が描かれ、ギーザの左下（北西）には2つのピラミッド [38] がそれぞれ三角形で示されている。中洲の方は現ローダ al-Rawḍah 島、2つのピラミッドの方はギーザにあるクフ王とカフラア王とのピラミッドにあたる。

3番目の筋をなすナイルと4番目の筋をなす山脈との間の南部には、諸オアシス地域 [45] があり、ヒラール族の諸居住地 [46] を含んでいる。本文中には、カラムーン al-Qalamūn 地区 (ḥārah) とカスル al-Qaṣr 地区とを有するダフラ・オアシス al-Wāh al-Dākhilah、ビーリース Bīrīs とビーヒート Bīkhīt とを有するハルガ・オアシス al-Wāh al-Khārijah に関する説明が見られる¹⁷⁾。

最後の4番目の山脈は「諸オアシスの山」[47] と明記されている。これは前述の諸オアシス地域 [45] と共に、平均高度が海拔約500mのガルビーヤ砂漠 al-Ṣaḥrā'

15) Ramzī [1953-, I, p. 29, II·3, p. 27]

16) 例えば、アシュムーナイン [29]、タハー [30]、カイス [31]、ダラース [33]、アトワーブ [35]、アトフィーフ [14]、アスクル [15]、ハイイ [16] は、当時も現在と同様に、川岸ではなかったと考えられる。

17) IH pp. 153-56.

al-Gharbiyah を指す。そしてこの砂漠は内部に、前記のダフラ・オアシスやハルガ・オアシスなど幾つかの窪地を有している。カールーン湖を含むファイユーム低地もその1つである。なお、この「諸オアシスの山」は、10世紀には「アジャーイブ (ʿajāʾib 驚異)」の対象となっており、空想的要素を多分に含んでいた。即ち、この山が2世紀のプトレマイオス Ptolemaeus 以来ナイルの水源とされてきた「月の山」¹⁸⁾に至ると想われていたのである。

以上の地点を現在に当てはめると、アスワーン [9]、イドフー [21] (以上、現アスワーン県)、イスナー [22]、アルマント [23] (以上、現ルクソール al-Uqşur 県)、コース [11]、ヒウ [24] (以上、現ケナー Qina 県)、バルヤナー [25]、アフミーム [12] (以上、現ソーハーグ Sūhāj 県)、アブーティーン [26]、アスユート [27]、マサーラ [28] (以上、現アスユート県)、アシュムーナイン [29]、アンシナー [13]、タハー [30]、ティルファ [39]、カイス [31]、バフナサ [40] (以上、現ミニヤー県)、スムスター [32]、イフナース [34]、ダラース [33]、ブーシール・クーリーディス [42]、アトワブ [35] (以上、現バニー・スウェイフ県)、ラーフーン [41]、ファイユーム [43] (以上、現ファイユーム県)、アトフィーフ [14]、アスクル [15]、ハイイ [16]、ハラス [17]、ギーザ [36] (以上、現ギーザ県)、ヘルワーン [18]、フスタート [19] (以上、現カイロ県)、クルズム [1] (現スエズ県) となる。ダラース [33] とイフナース [34] は、実際には順序が逆、即ち、[34] の方が [33] よりも南に位置する。

なお、スムスター [32] は現スムスター・アッ＝スルターニー Sumustā al-Sultānī、イフナース [34] は現イフナースィヤ・アル＝マディーナ Ihnāsiyat al-Madīnah、ブーシール・クーリーディス [42] は現アブー・シール・アル＝マラク Abū Šīr al-Malaq である。そして、アンシナー [13] は古のアンティノーポリス Antinoopolis で4世紀以降、キリスト教の主教座が置かれていたが、12世紀のサラディン Ṣalāḥ al-Dīn による破壊などもあって、現在は廃墟となり、アッ＝シェイフ・イバーダ al-Shaykh ʿIbādah 村に属している。また、ハラス [17] はナイル川の東側、アトフィーフ [14] とヘルワーン [18] との間にあったが、現在は荒廃している¹⁹⁾。その他、アスワーン [9] とコース [11] との間に置かれているムフダサ? ²⁰⁾ [10] 及び、イドフー [21] より南のナイル西岸に描かれているカルヤ? ー或る村(qaryah)とも採れる²¹⁾ [20] は、不明である。

IV. 図中の下エジプトについて

エジプト図の第2部分(全体の左半分)が下エジプト部分である。先ず、右上ー

18) イブン・ハウカルの本文中には、赤道の南に位置する「月の山」を水源とするナイル川の地図が描かれている (IH p. 149)。

19) Ramzī [1953-, I, p. 45]。

20) Cooper [2014, pp. 269, 273] は al-Muhaddatha (= al-Muḥaddathah) と読んでいる。

21) Kramers & Wiet [1964, I, p. 132] は Qariya (= Qariyah)、Cooper [2014, pp. 269, 273] は Qarih (= Qarīh) と、それぞれ読んでいる。

エジプト図全体のほぼ中央上部には、エジプト図 [48] と記されている。その下に、いわゆる「ムカッタムの山」の連年の続きが描かれている。実際にはシャルキーヤ砂漠の200~500mの高地が東へ伸びる。

その下の上部分、正確にはナイルのダミエッタ支流より上（＝東側）の地域がハウフ [49]、それより下（＝西側）の部分がリーフ [50] を示している。当時、一般的にはダミエッタ支流の東側がハウフ、或いは東ハウフ、ダミエッタ支流とロゼッタ al-Rashīd 支流との間がリーフ、ロゼッタ支流の西側がブハイラ al-Buḥayrah、或いは西ハウフと呼ばれていた。

イブン・ハウカルは下エジプトに関して、やはり東側から、ハウフ [49] の、ダミエッタ支流・分流域を、兩岸を問わず、南から北へと描いてゆく。その後、リーフ [50] に移り、アレクサンドリア運河流域、ロゼッタ支流東岸域、両流域より東の地域、ロゼッタ支流西岸域の順に描く。

前述の上エジプト図から続くナイルの流れはと言えば、シャタヌーフ [51] の手前で西のロゼッタ支流と分かれた東のダミエッタ支流は、北方へと流れ、ディグワ [52]（右岸）を過ぎるとバンハー・アル＝アサル [53]（右岸）の手前で、左方への水流を分岐させた後、タファフナ [54]（左岸）、サフラグト [58]（右岸）へと至る。そして当地において、右方へと進むサルドゥース運河 [56] を分岐させる。次いでサンド・バスト [60]（左岸）を経てズィフター・ガワード [59]（左岸）において、やはり右方へ進むダカドゥース運河 [63] を分岐させる。ダミエッタ支流はその後、イシュナワイ [62]（左側）²²⁾、ダムスィース [65]（左岸）を通り、「主流」と特に呼ばれる部分をバナー [66]（左岸）、アブー・スィール [67]（左岸）、サマンヌード [68]（左岸）、アウイーシュ [69]（右岸）、タルハー [70]（左岸）とカガンギーマ [71]（右岸？）へと進み、この付近で、右方へ流れるティンニース運河²³⁾を分岐させる。その後も北へ進み、マハッラ・シャルキーユーン [73]（左岸）やダミーラ [72]（左岸）方面から来た流れ（マハッラ運河とも呼ばれる）－前述したディグワ [52] とバンハー・アル＝アサル [53] 間で左方へ分かれた流れの延長の1つと合流する。そしてシャーリム・サーフ [81]（右岸）、ダカフラ [78]（右岸）²⁴⁾に至る。ここで再び右方へ進むダカフラ運河 [79] を分岐させる。ダミエッタ支流の方は更にシャーリム・バーリム [82]（右岸）を通り、西方のナキーザ [84] と連絡するザアファラーン運河 [85] と出合った後、ブーラ [83]（左岸）²⁵⁾、ダミエッタ [87]（右岸）に至り、ダミエッタの口 [86] を通って地中海へと注ぎ込む。即ち、イブン・ハウカルの地図上では、ダミエッタ支流は [51] から [58]、[65]、[71]、[81]、[86]を通っている。

22) 地図上ではダカドゥース運河 [63] の分岐点となっている。そして以下、サマンヌード [68] まで右岸となっている。

23) IH p.137. Cooper [2014, p. 299] は誤ってこの流れをダカフラ運河ととっている。

24) 地図上ではダカフラ [78]、シャーリム・サーフ [81] の順に描かれている。

25) 地図上ではザアファラーン運河 [85] と出会う前の地点に置かれている。

次に、ディグワ [52] とバンハー・アル＝アサル [53] 間で分かれた流れはタヌーハ [57] (右岸) を過ぎた後、2 手に分かれる。右流は ダムスィース [65] へと向かい、ダミエッタ支流と出合う²⁶⁾。左流の方はミフナーン [64] (左岸) からミリーグ [74] (左岸) へと進む。ここで更に2分流し²⁷⁾、その右流²⁸⁾はタターヤ (左岸) ²⁹⁾を通り、その左流³⁰⁾はザムズール (左岸) ³¹⁾、トゥーフ [76] (左岸)、マハッラ・ルーフ [77] (左岸) を通り、その後再び1つになり、マハッラ・シャルキーユーン (左岸) ³²⁾、ダミーラ [72] を過ぎてからダミエッタ支流に合流する。

また、タルハー [70] の対岸でナイルから分かれて右方へ流れるティンニース運河はその後、ダカフラ [78] から流れてきたダカフラ運河 [79] と合流し、ティンニース湖³³⁾ (マンザラ al-Manzalah 湖) へと流れ込む。地図の左端の上半分にある半卵形は湖で、ティンニース島 [89] などを有するマンザラ湖である。更にはダミエッタ [87] (左岸) とシャター [88] (左岸)、マンザラ湖とを結ぶ運河も見られる。

他方、シャタヌーフ [51]の手前で左へ分かれたロゼッタ支流は、ザート・アッ＝サーヒル [90] (右岸)、グライスィーヤート [106] (右岸) を通り、アブー・ユハンニス [91] (左岸) の先で、シュブラー・ラウン [107] (右岸?) やミヌーフ [108] (右岸) やタター [109] (右岸) 方面へと進む右側の流れ (アブヤール Abyār (Ibyār) 運河) を分岐させた後、タルヌート [92] (左岸)、ビスターマ [94] (右岸)、タヌーブ [95] (右岸) を進み、シャブール [96] (左岸) に至る。ここでアレクサンドリア運河³⁴⁾と分かれてバビーグ [128] (右岸) へと進む。ここでは前述のシュブラー・ラウン [107] とミヌーフ [108] とタター [109] からビンダーリーヤ [111] (左岸)、フィーシャ・バニー・スライム [110] (左岸) ³⁵⁾、マハッラ・アル＝マハルム [112] (左岸)、カリーブ・アル＝ウンマル [127] (左岸) を進む流れ (アブヤール運河) と再会する。そしてバビーグ [128]の対岸マハッラ・バビーグ [129] (左岸) からファルナワ [130] (右岸) 方面へ進む左の流れ (ファルナワ運河) を分岐させる。右の流れロゼッタ支流はサー [113] (右岸)、ディヤーイ [114] (右岸)、サーフィヤ [115]

26) Cooper [2014, p. 90] はこの流れを「ダムスィースへ向かう水路 (Damsis-bound waterway)」と説明する。

27) 地図上ではミリーグ [74] の手前、ミフナーン [64] を通り過ぎると2つに分かれる。

28) Cooper [2014, p. 90] はイブン・ハウカルに基づき、「タヌーハ分流」と記す。

29) [61] に当たるが、地図上では誤って、1つ前の右流、上述のダムスィース [65] へと向かう右流の右岸に置かれている。そして、こちらの右流は下記のマハッラ・シャルキーユーン [73] (右岸)、ザムズール [75] (左岸)、ダミーラ [72] (両岸) へ進むように描かれている。

30) Cooper [2014, p. 91] は「タヌーハ分流の副流 (sub-branch of Tanuha arm)」と説明する。

31) [75] に当たるが、地図上では誤って、この左流ではなく、右流の左岸に置かれている。註29参照。

32) [73] に当たるが、地図上では誤って、再び1つになるよりかなり手前に描かれ、右流の右岸に置かれている。註29参照。

33) IH pp. 156, 60.

34) IHp. 140. Mu'nis [1987, p. 315] は12世紀のイドリースィー al-Idrīsī に拠るのか、アレクサンドリア運河がシャブールよりも上流のザーウィヤ・アル＝バハル Zāwiyah al-Baḥr ータヌーブ [95] の北一でロゼッタ支流から分かれるとする。Cornu [1985, Carte X] もほぼ同様である。

35) 地図上ではフィーシャ・バニー・スライム [110]、ビンダーリーヤ [111] の順に描かれている。

(右岸)、ダミー・ガムール [116] (右岸)、ディスユー [119] (左岸)³⁶⁾、フーワ [118] (右岸) を通る。そしてサンディユーン [117] (右岸)³⁷⁾ 及び対岸のダイルート [137] (左岸) の手前で³⁸⁾、前述のマハッラ・バビーグ [129]、ファルナワ [130] からマハッラ・マスルーク [131] (左岸)、マハッラ・アビー・フラーシャ [132] (左岸?)、サンダビース [134] (左岸)、フィーシャ [133] (右岸)³⁹⁾、スンバーザ [135] (左岸) を進む流れ (ファルナワ運河) と再会する⁴⁰⁾。その後、バルヒーブ [136] (左岸)⁴¹⁾、ヌトゥービス・アッ＝ルンマーン [120] (右岸) やマハッラ・アル＝アミール [138] (左岸)、マハッラ・ブーラ [139] (左岸) を通ってロゼッタ (左岸) に至る。即ち、イブン・ハウカルの地図上では、ロゼッタ支流は[51]から [92]、[96]、[128]、[113]、[139] を通っている。

前に触れたアレクサンドリア運河はと言うと、シャープール [96] からマハッラ・ナキーダ [97] (右岸)、ダンシャール [98] (左岸)、カルタサー [99] (左岸?)、シャブルー・アブー・ミーナー [100] (左岸)、カラソフィール [101] (左岸)、カルユーン [102] (右岸) を通って、アレクサンドリア [104] (両岸) へと至る。

そしてシャタヌーフ [51] からは、街道がスブク・アル＝アビード [121]、シュブラー・ラムナ [125]、ミヌーフ・アル＝ウルヤー [122]、マハッラ・スラド [123]、サハー [124] を経て、サー [113] へと通じている。

この地図にはその他、バシュムール al-Baṣhmūr 湖 (ブルッルス al-Burullus 湖) の北の、地中海岸のアグナー [105]、アレクサンドリア運河の東方⁴²⁾の、イドクー Idkū 湖西岸のカルヤ・アッ＝スィール [103] といった居住地も描かれている。

以上のナイル支流・運河と集落とを現状に照らしてみる。上記のダミエッタ支流とロゼッタ支流の川筋は現在も基本的にはほぼ変わっていない。他方、その他の水路はかなり変化が見られるが、ダカードゥース運河は現ブーヒーヤ al-Būhīyah 運河 (turāh)、ティンニース運河は現バハル・サギール al-Baḥr al-Ṣaghīr、「タヌーハ支流」は現バハル・シビーン Baḥr Shībīn、アレクサンドリア運河は現アブー・ディヤープ Abū Diyāb 運河や1820年に完成したかのマハムディーヤ al-Maḥmūdīyah 運河と、それぞれ重なる部分がある。現在は残っていないザアファラーン運河 [85] はブルッルス湖とダミエッタ支流とを結んでいたと考えられる。また、サルドゥース運河 [56] はイブン・ハウカルの時代、干上がり使用されていなかったのか不明である⁴³⁾。

36) 地図上ではサンディユーン [117] が来ている。

37) 地図上ではディスユー [119] が来ている。

38) 地図上ではそれより手前にバルヒーブ [136] が置かれ、このバルヒーブがロゼッタ支流とファルナワ運河の合流点となっている。

39) 地図上ではフィーシャ [133]、サンダビース [134] の順に描かれている。

40) Mu'nis [1987, p. 315] ではファルナワ運河はダイルート [137] の先、ファザーラ Fazārah (=バルヒーブ) の手前でロゼッタ支流と合流する。

41) 地図上ではファルナワ運河はスンバーザ [135] の後、このバルヒーブまで続く。

42) 地図上では運河の西方に置かれている。

43) イブン・ハウカルは上記のように、この運河を干上がっているとしているが、彼とほぼ同時代のマスウディー al-Mas'ūdī はこの運河を現役のものとして挙げており [Ma II, p. 69]、ムカッ

その他、タヌーハ [57] を過ぎてダムスィース [65] へ向かう運河や、ダカフラ運河 [79]、更にはダミエッタとマンザラ湖を結ぶ運河に関しても不明な点が多い⁴⁴⁾。

そしてこの地図に挙がっている居住地も名称が変わったり、廃墟になったりしたものが幾つか見受けられる。現在、バンハー・アル＝アサル [53] はバンハー *Banhā*、ズィフター・ガワード [59] はズィフター *Ziftā*、マハッラ・ナキーダ [97] はナキーディー *al-Naqīdī*、フィーシャ・パニー・スライム [110] はフィーシャー・スライム *Fīshā Sulaym*、マハッラ・スラド [123] はスラド *Ṣurad*、マハッラ・アビー・フラーシャ [132] はアブー・ハラーシュ *Abū Kharāsh*、ヌトゥービス・アッ＝ルンマーン [120] はムトゥービス *Muṭūbis* と呼ばれている。他方、サフラグト [58] はサフラグト・アル＝クブラー (大サフラグト) *Ṣahrajt al-Kubrā*、バナー [66] はバナー・アブー・スィール *Banā Abū Ṣīr*、アブー・スィール [67] はアブー・スィール・バナー *Abū Ṣīr Banā*、アウイーシュ [69] はアウイーシュ・アル＝ハガル *Awīsh al-Hajar*、ディヤーイ [114] はマハッラ・ディヤーイ *Maḥallat Diyāy*、ディスユー [119] はディスヤー・アル＝カナーイス *Disyā al-Kanāyis*⁴⁵⁾、フィーシャ [133] はフィーシャー・バルハ *Fīshā Balkhah* と現在になっている。

また現在、マハッラ・シャルキーユーン [73] はマハッラ・アル＝クブラー (大マハッラ) *al-Maḥallat al-Kubrā*、アブー・ユハンニス [91] はアブー・ニッシャーバ *Abū Niṣhshābah*、シャブルー・アブー・ミーナー [100] はシュブラー・アッ＝ダマンフーリーヤ *Shubrā al-Damanhūrīyah*⁴⁶⁾、マハッラ・アル＝マハルム [112] はマハッラ・マルフーム *Maḥallat Marḥūm*、スブク・アル＝アビード [121] はスブク・アル＝アハド *Subk al-Aḥad*、シュブラー・ラムナ [125] はシュブラー・アン＝ナムラ *Shubrā al-Namlah*⁴⁷⁾、カリーブ・アル＝ウンマール [127] はカリーブ・イブヤール *Qalīb Ibyār* と呼ばれている。なお、彼が描くミヌーフ・アル＝ウルヤー [122] は、前後のスブク・アル＝アビード (現スブク・アル＝アハド)、マハッラ・スラド (現スラド)、サハーから考えると、現在のマハッラ・ミヌーフ *Maḥallat Minūf* ではないだろうか。更には、この地図上のサンフル [140] はサンフル・タールート *Sanhūr Ṭālūt* のことで、本文中に記述のあるサンフル、即ちサンフル・アル＝マディーナ *Sanhūr al-Madīnah* とは別であると考えられる⁴⁸⁾。

そしてタヌーハ [57] は別名のアントゥーハ *Antūhā* の音位転換で、現イスタンハー *Iṣṭanhā*、或いはマスギド・アル＝ハドウル *Masjid al-Khaḍr* のことと言われている。

ダスィー *al-Muqaddā* もこの運河に言及している [Mu, p. 206]。

44) Cornu [1985, Carte X], Mu'nis [1987, pp. 314-15], Ducène [2004, pp. 251-52], Cooper [2014, pp. 269, 306].

45) Ramzī [1953-, II・2, p. 269].

46) Ramzī [1953-, II・2, p. 287].

47) Ramzī [1953-, II・2, p. 100].

48) 本文中では、シャタヌーフからロゼッタへと至る街道の途中、ミスィール *Misīr* から次の宿駅の町としてサンフルの説明がある [IH p. 138]。これは [140] とは別のサンフル、即ちサンフル・アル＝マディーナを指す。

いる⁴⁹⁾。ミフナーン [64] は現ウナム・ヒナーン Umm Khinān、ザムズール [75] は現ガンズール Janzūr、ダミー・ガムール (或いはダマイガムール) [116] は現ガマダムーン Jamajmūn、タルヌート [92] は現タッラーナ al-Ṭarrānah、カラنفフィール [101] は現カービール Qābil、グライスィーヤート (或いはギリヤート) [106] は現ギリヤス Jirīs、バビーグ [128] は現アッビーグ Abbīj、スンバーザ [135] は現サナーバーダ Sanābādah、サンダビース [134] は現サマーディース Samādīs である。加えて、タンティター [126] は現タンター Tantā とされるが、地図上ではアブヤール運河の左岸で、カリブ・アル＝ウンマル [127] より南、タター [109] の対岸辺りに記されている。実際にはタンターは運河よりもかなり東 (右側) に位置する。その他、シャーリム・バーリム [82] は、現在は荒廃しているシャーリンバーラ Shārinbārah ーディンギワイ Dinjiwāy (シャーリム・サーフの西) か、ダミエッタの口 (thaghr) かにあったとされる一、或いはダカフラ [78] の北にあるシャラバース Sharabāṣ と考えられる⁵⁰⁾。

なお、荒廃してその跡地に新たな集落ができたことなどが理由で、現在は名称が全く変わっているものもある。ダムスィース [65] (荒廃) は現シュブラー・アル＝ヤマン Shubrā al-Yaman⁵¹⁾、ブーラ [83] は現カフル・アル＝バッティーフ Kafr al-Baṭṭīkh、カルヤ・アッ＝スィール [103] は現マンシャア・パスユーニー Mansha'at Basyūnī⁵²⁾、アグナー [105] (荒廃) は現クーム・ミシュアル Kūm Mish'al⁵³⁾、シュブラー・ラウン [107] は現ザーウィヤ・ラズィーン Zāwiyat Razīn⁵⁴⁾、マハッラ・バビーグ [129] は現ダフリーヤ al-Ḍahrīyah、マハッラ・マスルーク [131] (荒廃) は現イズバ・サリーム・バシヤ・トゥービグヤーン Izbat Salīm Bāshā Ṭūbijyān⁵⁵⁾、バルヒーブ [136] (荒廃) は現ファザーラ Fazārah と考えられる他、ザート・アッ＝サーヒル [90] は一説ではマンヤル・アルース Manyal 'Arūs であるとされる⁵⁶⁾。またティンニース島 [89] は、10世紀当時、この小島には大きな町があったが、624 AH / 1227年に町の破壊が始まり、現在は同島にその町の遺跡が残っているに過ぎない。その他、カンタラ [55] はサルドゥース運河 [56] にあった、恐らく「堰」の地点、カガンギーマ [71] は現マンスーラ al-Manṣūrah (616 AH / 1219年に建設) 辺りと考えられ、マハッラ・ブーラ [139] はロゼッタ支流の西側のブハイラ地方にあったと推定される。加えて、バラムーナート諸地域 [80] とは両バラムーン (現ダカフリーヤ県の、バラムーン al-Barāmūn 地域とカフル・アル＝バラムーン Kafr al-Barāmūn

49) イスタンハーは Cooper [2014, pp. 89-90]、マズギド・アル＝ハドゥルは Ramzī [1953-, II・2, p. 205].

50) Shārinbārah は Ramzī [1953-, I, p. 291]、Sharabāṣ は Ramzī [1953-, II・1, p. 243].

51) Ramzī [1953-, II・2, pp. 61-62].

52) Ramzī [1953-, II・2, p. 321].

53) Ramzī [1953-, I, p. 12].

54) Ramzī [1953-, II・2, p. 2 17].

55) Ramzī [1953-, II・2, pp. 295, 310].

56) Cornu [1985, p. 99] が Minyat al-'Arūs とする。但し、この地名は Ramzī [1953-, II・2, p. 167] に拠れば、正しくは Manyal 'Arūs となる。

地域⁵⁷⁾を含む地域を意味するのだろうか。

こうした集落を実際の位置に合わせてみると、ディグワ [52]、バンハー・アル＝アサル [53]、トゥーフ [76] (以上、現カルユービーヤ al-Qalyūbiyah 県)、シャタヌーフ [51]、タヌーハ [57]、ミフナーン [64]、ミリーグ [74]、ザムズール [75]、ザート・アッ＝サーヒル [90]、アブー・ユハンニス [91]、タルヌート [92]・[93]、ビスターマ [94]、タヌーブ [95]、グライスィーヤート [106]、シュブラー・ラウン [107]、ミヌーフ [108]、タター [109]、ビンダーリーヤ [111]、スブク・アル＝アビード [121]、(以上、現ミヌーフィーヤ al-Minūfiyah 県)、カンタラ [55]？、サフラグト [58]、アウィーシュ [69]、タルハー [70]、カガンギーマ [71]、ダミーラ [72] (以上、現ダカフリーヤ al-Daqahliyah 県)、タファフナ [54]、ズィフター・ガワード [59]、サンド・バスト [60]、タターヤ [61]、イシュナワイ [62]、ダムスィース [65]、バナー [66]、アブー・スィール [67]、サマンヌード [68]、マハッラ・シャルキーユーン [73]、マハッラ・ルーフ [77]、フィーシャ・バニー・スライム [110]、マハッラ・アル＝マハルム [112]、サー [113]、ミヌーフ・アル＝ウルヤー [122]、マハッラ・スラド [123]、シュブラー・ラムナ [125]、タンティター [126]、カリーブ・アル＝ウンマル [127]、バビーグ [128] (以上、現ガルビーヤ al-Gharbiyah 県)、シャーブール [96]、マハッラ・ナキーダ [97]、ダンシャル [98]、カルタサー [99]、シャブルー・アブー・ミーナー [100]、カラフイーール [101]、カルユーン [102]、カルヤ・アッ＝スィール [103]、ディスユー [119]、マハッラ・バビーグ [129]、ファルナワ [130]、マハッラ・マスルーク [131]、マハッラ・アビー・フラーシャ [132]、サンフル [140]、サンダビース [134]、フィーシャ [133]、スンバーザ [135]、ダイルート [137]、バルヒーブ [136]、マハッラ・アル＝アミール [138]、マハッラ・ブーラ [139] (以上、現ブハイラ県)、アレクサンドリア [104] (現アレクサンドリア県)、ナキーザ [84]、アグナー [105]、ディヤーイ [114]、サーフィヤ [115]、ダミー・ガムール [116]、フーワ [118]、サンディユーン [117]、ヌトゥービス・アッ＝ルンマーン [120]、サハー [124] (以上、現カフル・アッ＝シャイフ Kafr al-Shaykh 県)、ティンニース [89] (現ポート・サイド Būr Saʿīd 県)、シャーリム・サーフ [81]、ダカフラ [78]、シャーリム・バーリム [82]、ブーラ [83]、ダミエッタ [87]、シャター [88] (以上、現ダミエッタ県)となる。

前述のタンティター [126] の場合ほどはひどくないが、タターヤ [61] はタヌーハ [57] からダムスィース [65] へ向かう右流ではなく、ミリーグ [74] からダミーラ [72] へ向かう右流に、ザムズール [75] はミリーグからの右流ではなく、ミリーグからの左流に、マハッラ・シャルキーユーン [73] はミリーグからの右流ではなく、ミリーグからの両流が1つに戻ってからの流れにあったと考えられる。そして、ダカフラ [78] とシャーリム・サーフ [81]、フィーシャ・バニー・スライム [110] とビンダーリーヤ [111]、フィーシャ [133] とサンダビース [134]、バルヒーブ [136] と

57) Ramzī [1953-, II・1, p.213].

ダイルート [137] は、それぞれ南北の位置関係が逆であり、サンディューン [117] とフーワ [118] とディスユー [119] に関しては、フーワの南にディスユー、フーワの北にサンディューンが来る。

また、地図上ではタファフナ [54]、イシュナワイ [62]、バナー [66]、アブー・スィール [67]、サマンヌード [68]、マハッラ・シャルキーユーン [73]、タターヤ [61]、ビンダーリーヤ [111]、フィーシャ・バニー・スライム [110]、マハッラ・アル＝マハルム [112]、ディスユー [119] などは右岸に記されているが、実際は左岸と考えられる。反対に、シャーリム・サーフ [81]、シャーリム・バーリム [82]、タヌーハ [57]、ザート・アッ＝サーヒル [90]、ビスターマ [94]、タヌーブ [95]、ファルナワ [130]、フィーシャ [133]、マハッラ・ナキータ [97] などは左岸に記されているが、実際は右岸と考えられる。

この地図では、下エジプトの東部とシナイ Sīnā' 半島は、「ムカッタムの山」を除いて空白であるか無視されている。現在のシャルキーヤ al-Sharqīyah 県や、イスマーイーリーヤ al-Ismā'īliyah 県、北シナイ県に関しては、町村などの居住地の描出が見られない。しかし、本文中には、ビルバイス Bilbays、ファークース Fāqūs、グルギール Jurjīr、ファラマー al-Faramā、バッカーラ al-Baqqārah、ワッラーダ al-Warrādah、アリーシュ al-ʿArīsh、ラファフといった、フスタートからシリアへ向かう街道上の地点に関して説明が見られる⁵⁸⁾。同様に、シナイ山 Ṭūr Sīnā' や「イスラエルの民の荒野 Ṭih Banī Isrā'īl」（シナイ半島中部）とギファール（シナイ半島北部）も、本文中には説明がある⁵⁹⁾のに、地図上では描写がない。尤も、当時は港市として名高かったファラマーは、イブン・ハウカルによるシリア図の地図の先端に、そしてシナイ山と「イスラエルの民の荒野」とギファールもシリア図に描かれている。因みに、「クルズムの海」とクルズムはエジプトの図だけでなくシリアの図にも再登場する。

その他、本文中には、地図には挙がっていない、シュブラー・ラムナ [125] からアグナー [105] に至る道中にあるミスィール Masīr (Misīr)、ブグーム al-Bujūm、ナスタラーワ Nastarāwah、ブルッルス al-Barullus (al-Burullus) の記述も見られる⁶⁰⁾。

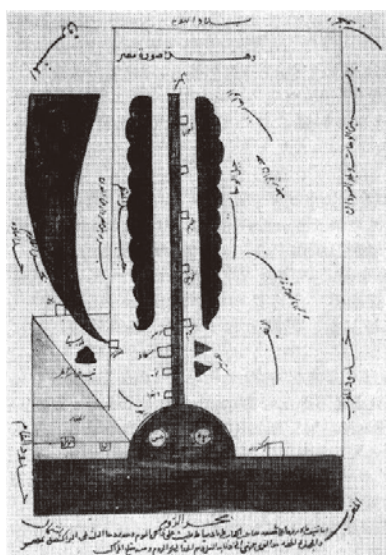
[付]. 他のバルヒー学派のエジプト図について

最後に、バルヒー学派においてイブン・ハウカルに前後するイスタフリー al-Iṣṭakhrī (350 AH/961年頃没) とムカッダシー al-Muqaddasī (380 AH/990年以後没) によるエジプトの図に触れておく。

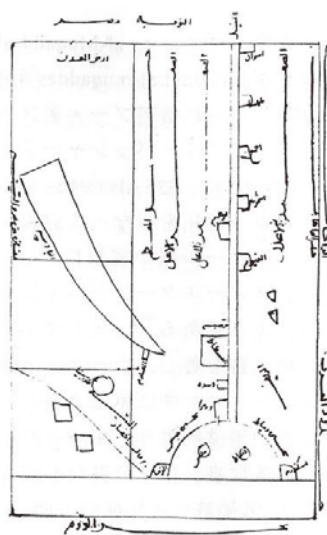
58) IH p.144

59) シナイ山と Ṭih Banī Isrā'īl は IH p.158、ギファールは IH pp.157,58

60) IH pp.138-39



イスタフリーのエジプト図



ムカッダシーのエジプト図

イスタフリーのエジプト図の代表例 [Cairo, Dār al-Kutub, MS. Geog. 256]⁶¹⁾は、南を天とする縦長の長方形1枚である。左(=東)から南北に、先ずクルズムの海とシナイ山と「イスラエルの民の荒野」とギファール、次に「ムカッタムの山」の連なり、3番目にナイルと両ピラミッドとティンニース湖、4番目に「諸オアシスの山」の連なりという構図になっている。南が広く北が狭いラッパ形のクルズムの海の先端に方形のクルズム、そして三角形のギファールの北底辺に方形のアリーシュとファラマー東向きの山形が南北に続く「ムカッタムの山」、帯状のナイル沿いに南から方形のアスワーン(西岸)、無記名の集落(西岸)、アフミーム(西岸)、アシュムーナイン(西岸)、ファイユーム(西岸)、ブースィール(東岸)、フスタート(東岸)、フーワ(東岸)、ダブクー Dabqū(東岸)、そしてナイルの西側に西向きの三角形の両ピラミッド、ナイルの河口に半円形のティンニース湖と円形のティンニース島とダミエッタ島、西向きの山形が南北に続く「諸オアシスの山」、更にはその北方にある「ルームの海(地中海)」沿いに方形のアレクサンドリアが描かれている。

アスワーンとアフミームは誤って逆の岸に置かれている。また、ファイユームとブースィールはナイル沿いになっているが、正しくはバハル・ユースフの2分流沿いにある。そして下エジプトのフーワはロゼッタ支流沿いにあるが、ダブクーはティンニース湖(マンザラ湖)の島である。

他方、ムカッダシーのエジプト図の代表例 [Berlin, Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung, MS. Sprenger 5]⁶²⁾はイスタフリーのエジプト図をほぼ踏襲した、より簡素なものとなっている。構図は基本的にイスタフリーと同じであり、

61) 他に少なくとも7種以上の同系統 (Iṣṭakhṛī I) の地図写本が知られている。

62) 他に2種の地図写本が知られている。

イスタフリーの図との差異は、「ムカッタムの山」と「諸オアシスの山」がそれぞれ図形ではなく文字だけで南北に表現されていること、ナイル沿いに南から方形のアスワーン（西岸）、バルヤナー（西岸）、アフミーム（西岸）、アシュムーナイン（西岸）、ブーシール（東岸）、ファイユーム（西岸）、フスタート（東岸）、ダミーラ（東岸）、ブーラ <Damrā [sic]>（東岸）、そして東向きの三角形の両ピラミッド、更にはティンニース湖の東端の「ルームの海」沿いにファラマー、湖の西端の海沿いにアレクサンドリアが描かれていることである。

下エジプトのダミーラはマハッラ運河の、そしてブーラはダミエッタ支流の、それぞれ西岸に位置する⁶³⁾。

即ち、彼らのエジプト図は極めて模式的な表現の図であり、ナイル川も南北に伸びる概念的な図表現を採っており、ナイル・デルタを作り上げている2大支流（ダミエッタ支流とロゼッタ支流）の区別さえ捨象していると言えるかも知れない。

V. おわりに

イブン・ハウカルはこのエジプト図は、他のバルヒー学派のエジプト図に比べると格段に詳しいだけでなく、西暦10世紀のエジプトを描いた地図としては、現在知られているものの中では最も詳しい。

地図に表わされた集落（町・村）数は3桁に達し、しかも、それらの大半が正しい配置となっている。その中にはクルズム[1]、アンスィナー [13]、ティンニース[89]といった当時はまだ有名であった地点（現在は廃墟）も含まれているが、表示されている集落の殆どが現存しており、西暦10世紀後半のエジプトの集落に関する貴重な情報を提供してくれる。

そして、この地図で最も目を引くのが、アスワーンからダミエッタやアレクサンドリアなどまで、ナイル川や運河の詳しい描出―但し、下エジプトにおけるナイル支流と運河の区別が描出できていない―である。ナイル本流及び、ダミエッタ支流とロゼッタ支流の他、南のバハル・ユースフ、東のティンニース運河や西のアレクサンドリア運河など重要な水路が描かれ、現在は失われたザアフアラーン運河 [85]も示されており、当時のエジプトの水路網の実情を窺わせる内容である。

こうした複数の水路とそれらに沿う多数の集落の描出は、当時のエジプトがまさに「ナイルの賜物」であったことを改めて認識させてくれる。

イブン・ハウカルのエジプト図は、西暦10世紀のエジプトの、とりわけ下エジプトの水路網を知る上で必要不可欠な史料であり、エジプトのナイルに関する研究においては、最近の研究でも重要な情報源として活用されている⁶⁴⁾。

63) そして、本文中ではファラマーもアレクサンドリアも地中海沿岸にあるとしか記されておらず [Mu pp. 195, 196-97]、地図上の表示は必ずしも湖岸という訳ではないと考えられる。

64) 例えば、Cooper [2014].

[参考文献]

(略号)

BGA: *Bibliotheca geographorum arabicorum*, 8vols., Leiden: E.J.Brill, 1870-94 [repr. 1967].

EP: *The Encyclopaedia of Islam*, second edition, 12vols., Leiden: E.J.Brill, 1960-2004.

IGAIW: Institut für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften an der Johann Wolfgang Goethe-Universität, Frankfurt am Main

[アラビア語原典]

IḤ: Ibn Ḥawqal, *Kitāb Ṣūrat al-arḍ*, ed. J. H. Kramers, BGA, II, 1938 [repr., 1967]

Ma: al-Masʿūdī, *Murūj al-dhahab wa-maʿādin al-jawhar*, ed. Ch. Pellat, 5vols., Beirut: al-Jāmiʿat al-Lubnānīyah, 1966-74.

Mu: al-Muqaddasī, *K. Aḥsan al-taqāsīm fī maʿrifat al-aqālīm*, ed. M. J. de Goeje, BGA, III, 1877 [repr. 1967]

[二次資料]

Cooper, John P., 2014, *The Medieval Nile: Route, Navigation, and Landscape in Islamic Egypt*, Cairo: The American University in Cairo Press.

Cornu, Georgette, 1985, *Atlas du monde arabo-islamique à l'époque classique: IX^e-X^e siècles*, Leiden: E.J.Brill.

Ducène, J.-C., 2004, Le Delta du Nil dans les Cartes d'Ibn Hawqal, *Journal of Near Eastern Studies* 63, pp.241-56.

Guest, A. R., 1912, The Delta in the Middle Ages: A Note on the Branches of the Nile and the Kurahs of Lower Egypt, with Map, *Journal of the Royal Asiatic Society of Britain and Ireland* 25, pp.941-80.

Halm, H., 1993, Miṣr D.3. The Fāṭimid period 969-1171, EP, VII, pp.162-64.

Kamal, Youssouf, 1926-51, *Monumenta cartographica Africae et Aegypti*, 5 vols., Cairo, [facimile reprint, 6 vols., ed. Fuat Sezgin, Frankfurt: IGAIW, 1987].

Kramers, J. H. & G. Wiet (tr.), 1964, *Ibn Hawqal Configuration de la Terre (Kitab surat al-ard)*, 2 vols., Paris: G. P. Maisonneuve & Larose, [repr. 2001].

Miller, Konrad, 1926-31, *Mappae arabicae: Arabische Welt- und Länderkarten des 9.-13. Jahrhunderts*, 6 vols., Stuttgart: Selbstverlag des Herausgebers [repr., 2vols. Frankfurt: IGAIW, 1994].

Miquel, A., 1971, Ibn Ḥawqal, EP, III, pp.786-88.

Miquel, André, 1980, *La géographie humaine du monde musulman jusqu'au milieu du 11^e siècle* III, Paris: Mouton.

Mu'nis, Ḥusayn, 1987, *Atlas Tārīkh al-Islām*, Cairo: al-Zahrā' li-l-Ilām al-ʿArabī.

Murād, Ṣarīf Ramaḍān, 2004, *Dirāsāt fī al-Turāth al-Jughrāfī al-ʿArabī, Ibn Ḥawqal wa-Manhajū-hu al-Jughrāfī*, Cairo: Maktabat al-Anglū al-Miṣrīyah.

Ramzī, Muḥammad, 1953-68, *al-Qāmūs al-Jughrāfī li-l-Bilād al-Miṣrīyah: min ʿAhd Qudamā' al-Miṣrīyīn ilā Sanat 1945*, 6vols., Cairo: Dār al-Kutub al-Miṣrīyah [repr. Cairo: al-Hay'ah al-Miṣrīyah al-ʿĀmmah li-l-Kitāb, 1994].

Tibbetts, Gerald R., 1992, The Balkhī School of Geographers, *The History of Cartography*, vol.2, book 1, *Cartography in the Traditional Islamic and South Asian Societies*, ed. J. B. Harley & David Woodward, Chicago: The University of Chicago Press, pp.108-36.

Toussoun, Omar., 1922, *Mémoire sur les anciennes branches du Nil, époques ancienne et arabe*, Mémoires présentés à l'Institut d'Égypte 4, Cairo: Imprimerie de l'Institut français d'archéologie orientale [repr., Frankfurt: IGAIW, 1992].

Toussoun, Omar, 1926, *La géographie de l'Égypte à l'époque arabe*, 3vols., *Mémoires de la Société Royale de Géographie d'Égypte* 8, Cairo: Imprimerie de l'Institut français d'archéologie orientale [repr., Frankfurt: IGAIW, 1992].

竹田新, 2004, 「バルヒー学派について」『関西アラブ・イスラム研究』4, pp.77-93。

竹田新, 2014, 「イブン・ハウカルの「マグリブとルームの国の図」—西暦10世紀の地中海世界図—について」『アラブ・イスラム研究』12, pp.77-109。